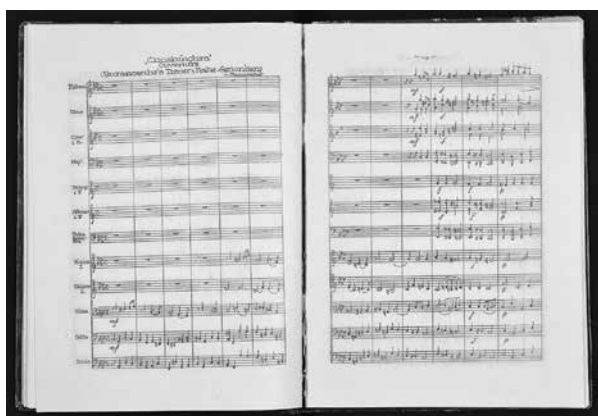


二つの周年記念企画展

2021年はプロイセン王国と江戸幕府が日普修好通商条約を締結してから160周年、音楽家であり丸亀と板東の俘虜収容所で楽団を指揮したパウル・エンゲルの生誕140周年となる年でした。これを記念してドイツ館では、二つの展示会を開催しました。

4月27日から6月27日までの間、パウル・エンゲル生誕140周年記念企画展「エンゲルとオーケストラー丸亀・板東での活動の足あと」では、エンゲルに関する新たな資料や捕虜時代の音楽活動をまとめた展覧会を開催しました。エンゲルが、1908年からベルリンのウンター・デン・リンデン通りのカフェ「オペラ」やホテル「アドロン」で演奏していたことや、日本での約5年にわたる捕虜生活で演奏会などを70回以上開催し、250種の曲を演奏したことを紹介しました。また、(公社)OAGドイツ東洋文化研究協会のご好意により同協会が所蔵する、捕虜たちの支援者で当時神戸在住の貿易商ハンス・ラムゼーガー氏が作曲した「忠臣蔵」前奏曲と「忠臣蔵」序曲の楽譜と、エンゲル・オーケストラの歴史をまとめた記念誌『エンゲル・オーケストラ その生成と発展 1914-1919』の原資料をお借りし、ドイツ館で初めて公開しました。



「忠臣蔵」序曲の楽譜 (公社) OAG ドイツ東洋文化研究協会蔵

10月26日から12月26日までの間、ドイツ連邦共和国大使館主催による「日独交流160周年展 一九世紀から現在までのドイツと日本」を開催しました。1861年の

日普修好通商条約の締結以降、軍事、司法、医療分野で協力関係にあった日本とドイツの歴史を、「模範から学ぶ」、「苦難から学ぶ」、「お互いから学ぶ」と、時代ごとにテーマを設け振り返る展示となりました。



日独交流160周年展のオープニングセレモニーの様子

展示会初日の開会式には、ドイツ連邦共和国大使館武官室のカルステン・キーゼヴェッター大佐と、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館のウーヴェ・メアケッター首席領事の挨拶のあと、来賓の皆さまとのテープカットで開催を告げました。また、開会式に先駆けて、ドイツ兵の慰霊碑前で献花式が行われました。(森)

ドイツ館 板東俘虜収容所講座の開催

ドイツ館では、1972年に開館して以来、元捕虜やその子孫、日本の関係者の方などから寄贈を受けた資料の公開と調査研究を続けてきました。現在も増え続ける情報も交えながら、最新の成果を4つのテーマにおいて、ドイツ館のスタッフがレクチャーを行いました(各概要は後記)。本企画は、感染症拡大防止のため、先着事前申込で定員25名に限定し開催しました。

第1回(10月30日)「ドイツ人捕虜の体育精神～プロイセン王国・ドイツ帝国の体育教育をめぐって～」(市国際交流員：ダリオ・シュトライヒ)では、当時のドイツの体育指導目標等を通じて、ドイツ人が日本の捕虜収容所で披露した体操「トゥルネン」にみる近代的体育精神の根本について焦点を当てました。第2回(11月13日)「エンゲルとオーケストラ」(館長：森 清治)では、140年前

に生誕し、丸亀と板東で活躍したエンゲル楽団の指揮者パウル・エンゲルの音楽家としての足跡を辿るなかで見える新たな事柄、また、エンゲルやその仲間のユーモアに溢れた素顔に迫りました。第3回(11月27日)「板東のドイツ人捕虜 グスタフ・メラーが遺したもの」(学芸員:長谷川 純子)では、孫のボルナー氏より寄贈を受けたメラーの遺産約160点を再調査し、板東で捕虜となった一人の人生と当時の社会状況を振り返ることで、「板東俘虜収容所」の像を浮かび上がらせる試みを行いました。第4回(12月18日)「板東ドイツ兵捕虜の暮らしと経済」(前館長・ドイツ館史料アドバイザー:川上 三郎)では、板東俘虜収容所にいた捕虜たちの日々の暮らしを概観する中で、残された当時の記録から、一般的にはあまり知られていない経済状況を明らかにしました。ドイツ館では、今後も板東俘虜収容所講座を開催する予定です。(長谷川)

ドイツ館板東俘虜収容所講座

1. ドイツ人捕虜の体育精神

約三年間板東俘虜収容所で暮らした千人ほどのドイツ人は音楽、芸術などで精神的かつ肉体的苦労や憂鬱、いわゆる鉄条網の病と戦いました。また、収容所新聞の『バラック』第一号に書いてある「健康ナル肉体ニ健全ナル精神宿レカシ」に窺えるように、ドイツ人は体を動かすことにも、当然であるかのように奨励しました。しかしその単なる健康や娯楽などの目的で行われたわけでもなく、ドイツ人が板東俘虜収容所で披露されたこの祖国のためにもなる運動への意欲は果たしてどこから生まれてきたのでしょうか。

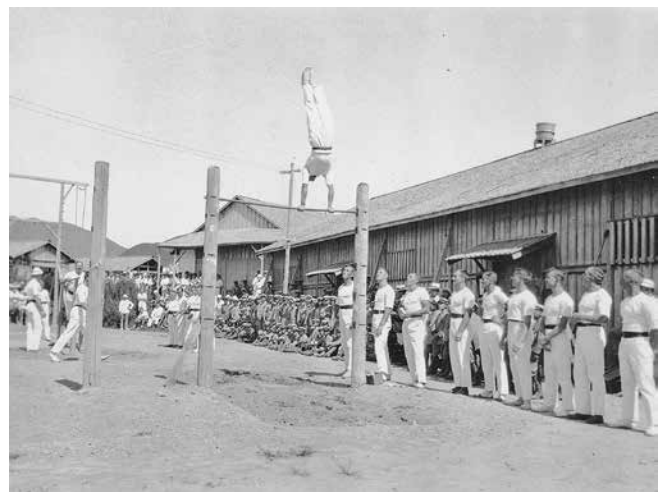
多くの捕虜が何らかの形で体を動かすことに価値を感じた理由の一つとして考えられるのは、19世紀のドイツ体育にあります。初めてドイツで体・健康づくりを教育機関に導入しようと試みたのは汎愛者と呼ばれる、18世紀に登場した教育者達でした。フランス人哲学者のジャン＝ジャック・ルソーの教育理想を受け継ぎ、ヨハン・クリストフ・グーツムート(1759年～1839年)をはじめとする汎愛教育者は鉄棒などといった新しい道具を学童に使用させ、またその使用の具合などを採点的に工夫し、体育の時間を創りました。

しかし、初代の汎愛者と違って、当時フランスに占領されたドイツを解放するために健康な兵士を養うこととドイツの統一を目指したフリードリヒ・ルードヴィッヒ・ヤーン(1778年～1852年)をはじめとする愛国者は子供の体を動かすことにドイツ統一や社会階層を超えた、全国民をつなげる運動への発展、という目的を加えました。学生の体育はドイツ国民性を表すものだと解釈されたことに

よって、本来のギリシャ語の「ギムナスティーク」ではなく、純粋なドイツ語と思われた「トゥルネン=Turnen」という言葉で表現すべきだと論じられ、また学校だけではなく、当時のドイツに流行しはじめたクラブ・協会ブームにも影響を受け、このドイツ式体育なる「体操=トゥルネン」が段々と全国に普及しはじめました。

19世紀末まではこの「トゥルネン」こそが、ドイツにおける体を動かすことにおける当然のやり方として認識されました。板東俘虜収容所に収容されたほとんどのドイツ人は1890年代に生まれたので、彼らはトゥルネンを学校や協会で味わったに違いないでしょう。ただし、捕虜たちが学校に通っていたころはイギリスから導入された「スポーツ」も教育の一環として推薦されつつあった時期でした。これで学生の健康的な運動を促すために採用された様々な「遊び」も登場し、捕虜たちがトゥルネン以外にその新しい体の動きも意識したに違いないでしょう。

長年独占的な位置を誇った「トゥルネン」から、娯楽などをも目的とした海外の遊びの導入を意味した「スポーツ」への、ちょうど19世紀末のドイツ社会に現れた運動に対する意識変革は板東俘虜収容所に暮らしたドイツ人にも確認できます。



地元学生の見学のため板東俘虜収容所でトゥルネンを披露する捕虜たち

開設された1917年4月まもなくスポーツ委員会が設立され、収容所の南に広がった借地をテニスコート、サッカー場、ホッケー場などに改造し、所内にもトゥルネンやボクシング用の運動場が設置されました。捕虜たちが以前暮らしていた収容所ではスペースがなかったからこそ、古きトゥルネンが盛んにおこなわれていましたが、「祖国のために」も行われるトゥルネンの魅力は敗戦、そしてとりわけより広い運動場に使えるスペースを提供した板東俘虜収容所の環境に適いませんでした。年齢の違いによって外国スポーツに対する意欲の差も考えられますが、板東トゥルネン協会会員名簿を調べたことで判明したのは、むしろ若手体操家のほうが古参より根強くドイツ式運動に励んだことです。

戦前に遠く離れた祖国のドイツで現れた体を動かすこと

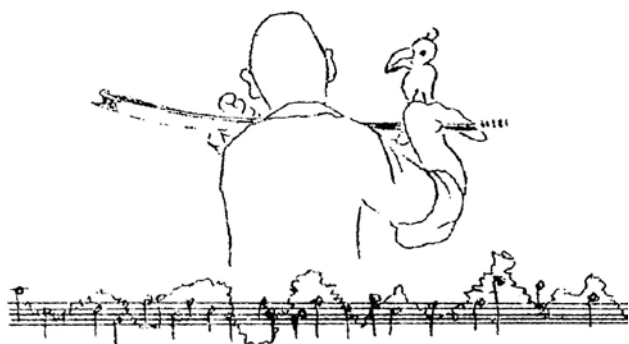
の多様化をこうして板東俘虜収容所に暮らしたドイツ人でも確認できることは、ドイツにおける社会流行の遠く離れた植民地および収容所における影響力をかたります。

(シュトライヒ)

2. エンゲルとオーケストラ

2021 年はパウル・エンゲル生誕 140 周年を迎える年でした。ドイツ館では誕生日の 6 月 5 日を挟み記念企画展を、11 月 13 日にはドイツ館講座で「エンゲルとオーケストラ」と題し捕虜時代の活躍を中心に紹介しました。

今回新たに紹介したエンゲルが大連ヤマトホテルへ送った手紙から判明した、ドレスデンとライプチヒで音楽の理論とヴァイオリンを学び、様々な楽団での演奏経験を活かしベルリンで商業的演奏を行っていたことは、先の「二つの周年記念企画展」で紹介しました。上海居留地工部局音楽隊での演奏活動や青島での戦闘を経験後、捕虜として日本へ移送されますが、収容所で仲間たちと楽団を結成し再び音楽活動を始めます。プロのヴァイオリニストとしての高い演奏技術を維持しつつ、演奏経験が未熟な戦友たちが奏でる音色を整え、一つのハーモニーとして昇華させたエンゲルの音楽家としての指導力は並外れたもので、ポピュラー曲から交響曲まで演奏できる楽団に育てます。厳しい姿勢で音楽と向き合い、最高の音色を響かせるため日々練習を重ねたエンゲルの姿は、真面目で音楽一筋という印象を我々に与えていました。しかし、元捕虜エーリッヒ・ドアート氏が保管していたエンゲル楽団の記念誌『ビール新聞』第 4 号に掲載された楽団の創設者を称える替え歌にはそれとは対極した、エンゲルは賭け事が大好きでおしゃべりであると歌われています。丸亀時代の楽団のメンバーは、演奏会の後の大量の冷えたビールを思い浮かべながら夏場の練習を耐え抜きましたが、捕虜の身でありながらも団員たちがエンゲルと一緒に音を楽しむことを忘れずに活動できたことが、ほんの数年間の活動で演奏レベルが向上した理由のように思えます。捕虜生活の中でも、ドイツ人が生きていくために必要な音楽の灯を決して絶やすことなく、捕虜から解放されるまで最高の音楽を提供し続けたエンゲルは、まさにプロの音楽家でした。(森)



3. 故郷でのヴィルヘルム時代と板東での活動 「板東のドイツ人捕虜

グスタフ・メラーが遺したもの」より

グスタフ・メラーとは、「板東俘虜収容所」に収容されたドイツ人捕虜の一人です。彼は板東俘虜収容所新聞『ディ・バラッケ』の編集部員を務め、謄写版による挿絵やプログラム類等の多くのデザインを担当していました。

メラーは 1890 年 1 月 26 日に、ドイツのロストックで生まれました。このロストックは、バルト海に沿って畑と牧草地の広がる広大な平野があり、主に農業が行われている場所です。19 世紀末は、近代化から 1871 年にビスマルクにより、プロイセンを中心としたドイツ帝国が成立し、メラーが生まれた 1890 年は、ヴィルヘルム 1 世が死去し、即位したヴィルヘルム 2 世により、ビスマルクが解任された年でもありました。帝国創設後の 1890 年、最初の 20 年で人口は約 800 万人増加し、1910 年時点では、ドイツ国民の過半数は 30 歳以下により構成された若いドイツとなりました。同時に、工業を軸とする経済・貿易が向上し、1890 年代、短い景気後退を挟みながらも、ほぼ 20 年に渡る好況期に入りました。当時、ドイツの鉄鋼の生産は、イギリスを凌駕し、輸出も伸び、それ以外にも、重化学工業等、先端産業部門でも驚異的な発展を遂げたのがこの時代のドイツでした。このように、ヴィルヘルム時代 (1890 ~ 1914 年) は、様々な分野での近代化とその付随現象が全面的に現れた時期であり、帝国主義の拡大を正当化し、さらに強くドイツ民族の統一、発展を志す運動が台頭した時代でもありました。また、この時期は、人々を国家につなぎ止める手段としてモニュメント的建築が流行し、モダンなユーゲント様式を取り入れたモニュメントが建設されました。例えば、ヴィルヘルム皇帝記念碑は、彼の功績を称え、1880 年代末から 1905 年にかけてドイツ各地に 400 基以上が建てられています。

それと同時に、通信網の広がりから万国博覧会開催等、国際的な運動も盛んとなりました。日本美術に影響を受けたドイツ版のアールヌーヴォーであるユーゲント様式は、ミュンヘンやドレスデンを拠点として発展しました。1896 年にドイツ語圏の世紀末美術の傾向を示す雑誌『ユーゲント』がミュンヘンで刊行されましたが、これは古い伝統を断ち切り、新しい芸術を目指すものでした。この頃はまさに西欧全体にヴィジュアル雑誌が創刊された時期でもありました。メラーが多感な幼少期、そして青年期を過ごしたドイツは、このような時代であり、時代背景は、その後の板東での活動、多くの新聞、冊子の発行やデザイン様式、モニュメントの建立等、様々な点に影響を及ぼしていることが見て取れます。

さらに、板東でのメラーのデザインは、少年期に彼が地

元で描いたスケッチにもその源泉を見出すことができます。彼のスケッチで最も古いものは、14歳の時（1904年）のものが残されています。



メラー 14歳のスケッチ（1904年）

その構図は、14年後、板東でメラーが描いた1918年12月発行『ディ・バラッケ』3巻12号の表紙に用いられています。

その他にも同様の事例があり、おそらくメラーが収容所内で、故郷を思い出しながら描いたと思われます。少年期に描いた自然の風景は、収容所の閉鎖された中でも、想像力を高め、表現力を豊かにする一助となったのではないのでしょうか。メラーに関する調査結果は、続けて報告を予定しています。（長谷川）



『ディ・バラッケ』3巻12号（1918年12月発行）の表紙

4. 捕虜とお金の話

板東俘虜収容所に限る話ではないのですが、捕虜たちは基本的に収容所側から日常的に何らかの仕事を課せられることはありませんでしたし、食事日本人より体格の良い彼らにとって満足のいくものではなかったにしろ、三食きちんと供給されていました。しかし、酒（基本的にビールのみ）やタバコなどの嗜好品は、たまに寄贈などで手に入る場合をのぞいて自らの出費で購わなければ楽しむことはできません。

さらに、捕虜となる前に就いていた仕事は当然ながらできず、暇な時間がたっぷり生まれているわけです。その時

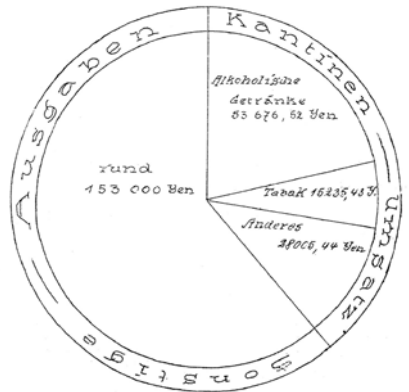
間を怠惰に過すつもりがないなら、それを自分たちの自発的な活動に振向けることになります。そのためには道具や材料を購入する必要があります。また勉強をするとしても、教材が手元になければそれをどこから調達しなければなりません。

こうした日常生活上のもろもろのために、捕虜といえどもお金を所持していなくては不自由なことになります。捕虜収容所で金銭のやり取りがあり、結構な金額が動いていることを聞くのは、捕虜という囚われの身であることを考えると不思議な気がします。紛れもない事実なのです。実際、俘虜情報局事務官の視察報告に、徳島収容所の捕虜は現役兵が最も多くて貧困者が多く、そのため衣服は収容所からの支給品のみでしかも不十分であり、洗濯するとその間ほかに着る物がなくなってしまう人もいたとあります。言換えれば、収容所でも日常の身だしなみを整えるために自分自身で費用を賄わないといけなかったのです。

捕虜たちが日常楽しむ嗜好品としてビールとタバコがありました。ここに、それらを販売していた板東の酒保（収容所内売店）の売上げデータ（1917年6月～1918年3月）があります。

アルコール類	53,676 円 52 銭
タバコ	15,235 円 43 銭
その他	28,005 円 44 銭
合計	96,917 円 39 銭

単純に物価が1千倍（3～4千倍という試算もあります）としても、ビールなどのアルコール類の売上げだけでも10ヵ月間に現在の5千万円以上もあったことになります。酒保以外に、捕虜自身の運営する各種



「捕虜とお金」の円グラフ：酒保とそれ以外の支出

店舗（肉屋とか菓子店、小料理屋など）や工房などがありましたが、そのための資金が当然必要ですし、利用者は購入のためお金が要ります。

一方捕虜たちはこれだけの金額を何らかの形で入手しなくてはなりません。収容所への送金は現金書留、郵便為替、銀行振込などで、親族や友人あるいは以前勤めていた会社からであったり、自身の預金の取崩しの形で現金を手にしていました。板東ではその総額が1918年の1年間に39万円にもなったそうです。（川上）

《所蔵資料紹介》 『大正七年起 俘虜収容所員賣 乾商店』

ドイツ館所蔵の『大正七年起 俘虜収容所員賣 乾商店』は、1918（大正7）年9月から1920（大正9）年4月にかけて、板東俘虜収容所の所員へ酒類など飲料水を販売した際の売掛帳です。この帳簿を作成した出入り業者が販売の対象を収容所員としたためか、板西警察分署警備警察官出張所の日誌の写しである『大正六年 雑書編冊』の「大正六年五月十日付 出入商人に関する件」、および『板野郡誌』（大正15年刊）第三編時代史 第十三章諸戦役（七）俘虜収容所「当時に於ける収容所の御用商人と納品」にも乾の名での酒類販売者は見当たりません。

購入期間に差はありますが、この商店で最も多く購入した所員は岡正章一等主計で、1918年9月10日から1920年4月10日の約20か月で、日本酒138本、ビール19本、シトロン12本など140円87銭（1円≒3,000円換算で422,610円）分を購入します。大塚岸三通訳は1918年9月6日から1920年3月12日までの19か月で、日本酒102本、ビール37本、シトロン13本、サイダー8本、ワイン5本など122円74銭（368,220円）分を購入。松江所長も1918年9月15日から1920年3月25日の19か月で、日本酒110本、ビール40本など106円81銭（320,430円）分を購入します。年始のあいさつに訪れた所員らに振舞う酒でしょうか、1919年1月には25本の日本酒を購入しています。

父親がドイツ留学経験者で陸軍大臣だった木越二郎中尉はビールを好み、1918年11月4日から1920年2月21日までの16か月で日本酒51本に対しビール108本を購入。木越中尉は他の職員が飲んでいない黒ビールも13本注文しています。一方、高木繁副官の購入量は極めて少なく、アルコールは1918年9月26日にビールを3本購入したが返品し、10月5・6日に清涼飲料水「三ツ矢サイダー」3本ずつ購入したのみで、以降の記帳はありません。諏訪邦彦中尉は14か月で日本酒7本を7円10銭（21,300円）



帳簿の1ページ

で購入したのみとなっています。

帳簿に記された商品数を種類別に見ると、日本酒639本、ビール452本、ワイン54本、ベルモット1本、シトロン408本、サイダー46本、水26本、炭酸47本の1,673本で、総額1,053円55.5銭（3,161,805円）の売上げでした。

日本酒は板野郡撫養町（現鳴門市）の酒造場が醸造した「花乃春」が取り扱われていますが、1918年9月に1本70銭（2,100円）であったものが、1919年2月には95銭（2,850円）、10月には1円20銭（3,600円）に値上がりしています。ビールは「アサヒ」が1918年11月に1本30銭（900円）が、1919年8月には35銭（1,050円）に、「シトロン」は1918年11月に1本16銭（480円）が、1919年7月に19銭（570円）、12月には23銭（690円）まで値上がりしています。「シトロン」は、1909年に大日本麦酒が販売を始めた炭酸飲料のことと思われ1915年からは「リボンシトロン」の名称で販売されています。

一方、ドイツ兵捕虜に関しては、購入品の詳細を示す記録は残っていませんが、1926（大正15）年に編纂された『板野郡誌』に板東俘虜収容所に入出した御用商人と納入品目が記されています。そこから15の業者と個人が、牛肉、豚、バター、牛乳、豆腐（ヨーグルト？）、果物、野菜、缶詰、ビールなどの品目を納入していたことが分かりますが、このうちビールは3人が納入していました。



ビールジョッキを持つ捕虜

この資料は俘虜収容所員の酒類と清涼飲料水の販売実績という限られたものですが、日本国内でもビールの製造・販売が盛んとなった大正時代でも、まだまだ日本酒を好む日本人が多数を占めていたことを表しています。ドイツ兵捕虜がどれだけビールを消費したかについては記録がないため分かりません。木越中尉がテレビ制作会社のインタビューで「ドイツ兵捕虜から「お前はどの位ビールを飲む

んだ」と問われ、ビンで3本と答えると、「ドイツ人は少し飲むと言えば1ダースだ」と言われビックリした」と語っています。日本ではまだまだ高価だったビールを、ドイツ兵捕虜は大量に消費していることに驚いた様子をうかがうことができるとともに、所内でもビールと良い付き合いをしていたことを想像させます。(森)

ヘルマン・ハンゼンと徳島オーケストラ

板東俘虜収容所でベートーヴェンの第九交響曲がアジアで初めて演奏されたのはよく知られています。しかし、それをしたのが「徳島オーケストラ」という楽団であり、指揮者がヘルマン・R・ハンゼンであったことはそれほど知られていないかもしれません。今冬このテーマで企画展示をする機会に、この楽団と指揮者について少し紹介してみたいと思います。

この楽団の名称は、単純に徳島俘虜収容所時代に生まれたからです。その時期は残念ながら不明ですが、1915年4月5日発行の徳島収容所新聞『トクシマ・アンツァイガー』第1号にはすでに合奏団について述べられています。徳島収容所にドイツ兵がやって来たのは1914年12月18日ですから、結構早い時期から音楽活動が始まっていたことになります。最初小人数で楽器も十分に揃っていない状況から、徐々に楽器を揃え、楽譜も集めつつ演奏活動を充実させていったようです。1916年8月20日にはコンサートは50回目を迎え、団員も29名を数えるまでに成長しています。掲載の写真は撮影の季節がちがいますが、ほぼ同数のメンバーが見られます。それにしても捕虜全体で206人の中でこれだけの人数が集まっているのは、日本全国の収容所で徳島しかありません。



徳島収容所本館前の徳島オーケストラ

この楽団を当初から率いていたのがハンゼンですが、彼は音楽学校を出た後軍隊に入り、その後青島時代には膠州海軍砲兵隊(MAK)で楽隊を指揮していました。徳島にいた人たちはこのMAK所属の兵士がほとんどでしたが、

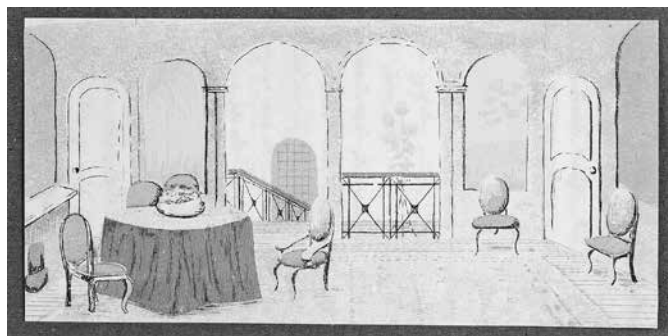
楽団員はその中でも第3中隊の人たちが大半を占めていました(写真中の人物は中央の3人をのぞいて同じ水兵服を着ています)。ハンゼンもそのひとりです。それだけに楽団としてのまとまりが非常に良かったのではないのでしょうか。しかし単に所属部隊が同じというだけではなく、指揮者ハンゼンの音楽家としての才能とその人となりが大きかったと思われます。市販の楽譜が入手できないときはピアノ譜から編曲したり、入手できてもその時の楽団の楽器構成に合わせて編曲しなおしたりしました。人となりについては、彼が一足早く帰国することになり「お別れコンサート」を開催したときの板東収容所新聞『ディ・バラッケ』(1919年8月号)の記事から推し量ることができます。

「彼はもっとも功労ある人物のひとりであり、収容所でもっとも人気のあるひとりであったと言ってもよい。それは、彼に対する極めて心のこもった別れを見れば分かるし、25日夜のお別れコンサートで彼に向けられた嵐のような喝采もその証拠である。」(川上)

板東俘虜収容所の芸術家たち

板東俘虜収容所において制作された印刷物は、ウィーン分離派の作品からの影響がみられることが、これまでも指摘されてきました。実は、それはグスタフ・メラーのデザインに最も顕著に表れています。板東でベートーヴェンの第九交響曲の演奏の際に、メラーにより制作されたプログラムは、1902年のウィーン分離派展で展示された《ベートーヴェン像》とリースが組み合わされたデザインでした。それ以外にも、メラーはウィーン分離派の影響を受けたデザインにより、板東の様々な活動約140点あるプログラムのうち、半数以上を制作しています。さらに、彼のデザインには、季節の花や夏には海や日本の提灯、冬には雪景色等、四季を意識したものになっており、日本的な自然を重んじた感性も窺えます。

しかし、板東にはメラー以外にも作品を残した捕虜がいました。メラーの作品と比較しながら5人の捕虜を紹介します。一人目、ヴィルヘルム・ブロンベルクは、「収容



ヴィルヘルム・ブロンベルク
喜劇「ミンナフォンバルンヘルム」の舞台背景画

所内のスケッチ 10 枚」等を手掛け、板東で行われた演劇の多くの舞台美術や面、衣装の制作をしました。メラーと異なった作風で主に風景画を得意とし、描写力ある作品を残しています。

二人目、カールステン・ヘルマン・ズーアは、建築家であったこともあり、細やかな写実を得意とし、『ディ・バラック』にもそのスケッチを掲載しています。彼の描くスケッチは、主に日本建築と自然をモチーフにしており、東洋文化への関心がみられます。また、ヴィルヘルム・ジームセンは『ふるさとカレンダー』に作品を残し、写実画を得意としながら、地元の人々を近距離で描く特徴があり、自由な交流が許されていたことを証明する作品を残しています。

現在、現物がほとんど残っている当時の収容所で定期的に発行された松山、徳島、板東の収容所新聞を比較すると、松山と板東の挿絵は細かく丁寧に表現されています。これは、松山からの捕虜は、板東で美術活動を活発にしていたメラーやブロンベルク、ズーア、ジームセンなど芸術的な才能に恵まれた捕虜が多かったことが要因として考えられます。

四人目、ヴィルヘルム・ムッテルゼーは、詩画集『鉄条網の中の四年半』のスケッチを担当し、人々の様子を観察し、時にユーモラスに描いています。ただ比較するとメラーのイラストは、よりコミカルな要素を含ませるのが得意だったようです。また、彼はプログラム等のデザインに関わることはあまりありませんでした。最後に、フリードリヒ・シュミートは、徳島収容所では、1915 年 11 月に開催されたスポーツ大会の表彰状の図案を製作等、様々な制作の場で活躍をしました。板東においても、初期の頃は市松文様や蔓の渦巻文様等を用い、コンサートのプログラムをデザインしていました。しかし、後期になると板東においてメラーのデザインが多くを占めるようになっていきました。

このように板東では、独自の特徴をもち、それぞれの分野で制作活動を行っていたことが分かります。

(長谷川)



フリードリヒ・シュミート
音楽プログラム「第 4 回 室内楽の夕べ」
1918 (大正 7) 年 3 月 4 日

鳴門市ドイツ館所蔵資料 印刷物のインキの理化学的分析調査

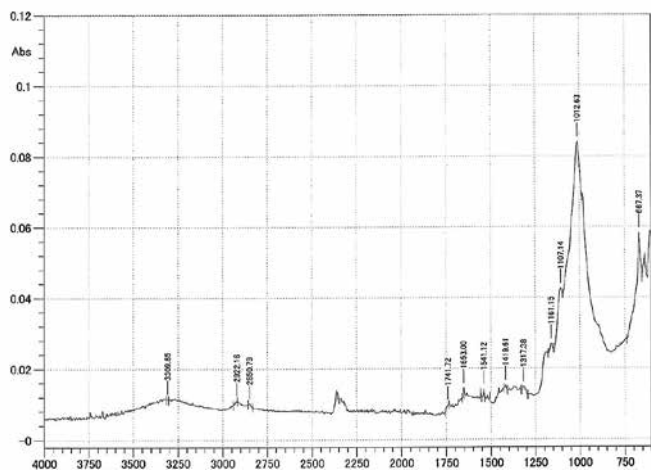
資料の適切な保存方法を明確にするには、材質を知る必要があります。板東における印刷方法は、収容所新聞『ディ・バラック』の中で一部記されていますが、具体的な謄写版や石版に用いられたインキについて、詳細な記録は現在のところ見つかっていません。そこで「板東俘虜収容所関係資料」の石版と謄写版のインキの材質について、理化学的分析により調査を行いました。今回、分析したのは、ドイツ館所蔵の印刷物 10 点で、対象の資料は謄写版と石版の赤色 5 点、謄写版と石版の黄色 5 点です。

印刷インキの製造は、19 世紀末にドイツで発展し、1910 年代には世界合成染料の 80% をドイツで生産していました。日本においては、1871 (明治 4) 年に大蔵省で印刷局が設置され、紙幣発行のため、初めてインキの製造に着手しました。民間においても石版印刷が普及しましたが、当時の民間の石版印刷業者は、印刷インキの大部分を輸入に頼っており、明治後期になってもそれは変わらなかったようです。

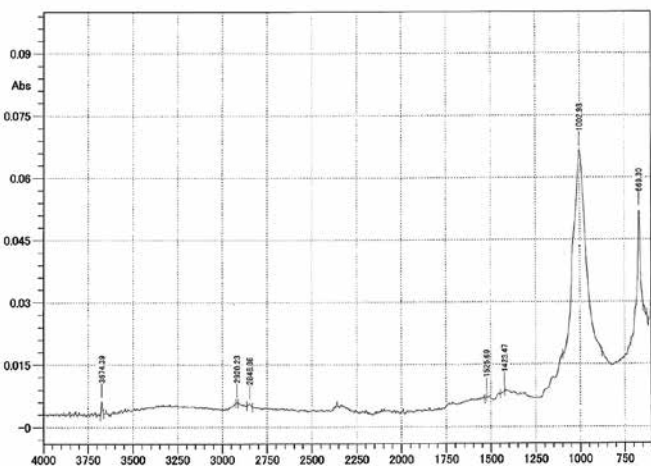
1914 年から始まった第一次世界大戦により、ドイツから日本へのコールタール等インキ製造に要する原料と合成染料の輸入が途絶えてしまいます。日本の印刷インキの製造技術が急速に向上したのは、この第一次世界大戦による輸入が途絶えたことの結果でした。このように 1917 年から 1920 年は、ドイツ製の合成染料から国産の染料に移り変わる過渡期であり、インキ製造に用いられる色料やインキ自体も、国産と海外産が使用されていた可能性が考えられました。また、板東に残る記録からは、捕虜の中にアニリン染料に詳しい者がいたことが推測され、日本産、ドイツ産の市販インキに加え、独自にインキを製造をしていた可能性も考えられました。

ドイツ館では上記の資料を蛍光 X 線分析装置を用いた元素分析により、インキに使用された色料の無機物に関する調査を行い、さらに同資料のインキの有機物の分析については、FT-IR ATR 分析を行いました。分析結果では、分析数に限りがあることに加え、印刷用インキにレーキ顔料が広く普及した時代背景を踏まえると色料の特定は難しく、成分自体の解明までには及ぶことはできませんでした。しかし、謄写版印刷と石版印刷の同色のインキを比較すると、印刷方法を区別することなく、有機物、無機物とが類似するインキが数点、検出されました。

以上の結果から考察すると、謄写版印刷、石版印刷の印刷技法に関係なく、表現したい色を出すために色材を使用していた可能性が窺えました。今回の分析は、分析数に限



EH050 FT-IR ATR スペクトル (赤・石版)



EH083 FT-IR ATR スペクトル (赤・謄写版)

りがあり十分であると言い難いのですが、石版印刷と謄写版印刷のインキの使用を分けていなかった可能性が高いことが明らかになったことは興味深い結果でした。

(長谷川)

ドイツ館でドイツ・クリスマスワークショップ

2021年12月19日にドイツ館で徳島県及び鳴門市のドイツ人国際交流員がドイツ風クリスマスデコレーションを作るワークショップやドイツのクリスマス祭を紹介するおはなし会を開催しました。

午前10時から午後3時まで開かれたワークショップでは、松ぼっくりなど季節を表す材料でクリスマス人形を作ったり、ロウソクを入れる空瓶の外側に雪の結晶マークなどを加えることでランタンを作ったりしたほか、ドイツ語のクリスマス挨拶文とクリスマスらしいイラストを加えたクリスマスカードを手作りました。



また、午後3時半から30分程のおはなし会では、ドイツ人国際交流員が母国のクリスマス季節に行われる行事やそれぞれの家族で見られるクリスマス習慣などについて講演しました。



本来は、参加者にドイツのクリスマスお菓子などを作って召し上がってもらう予定もありましたが、コロナ対策として、自宅で作れるように、日本語のレシピ集を作成し、現地で配布しました。参加者は約100名を超え、「作ったランタンを部屋で飾るのが楽しんだ」など、楽しんでくださったというコメントを沢山いただきました。おはなし会では、参加者の質問に答えるなど、ドイツのクリスマスについての知識を広めることもできました。(シュトライヒ)

❖ 今後の予定 ❖

2022年1月28日から3月27日まで、企画展「ヘルマン・ハンゼンと徳島(MAK)オーケストラ ドイツ兵捕虜たちの徳島と板東での音楽活動ー」を開催します。

2022年松江150周年記念展

開催時期が決定しましたら、鳴門市公式ウェブサイト等でお知らせします。